

III 訪問記 III

観光教育・研究のあるべき姿を模索して —セントラル・フロリダ大学ローゼンカレッジ訪問記—

河村 誠 治

はじめに

筆者は、平成19年度観光経済分析プロジェクトによる外国実地調査計画（社会の要請に応える特色ある教育の実践 - 観光政策教材開発事業）の一環として、米国フロリダ州オレンジ郡オーランドにあるセントラル・フロリダ大学ローゼンカレッジ（ローゼン校）などを平成19年8月31日～9月6日にかけて訪れる機会をえた。訪問の目的は、主として、当カレッジのホスピタリティ・マネジメント学部の教育プログラムやそこで行われている実践的な授業（インターンシップを含めて）などを見聞し、山口大学経済学部観光政策学科、ひいてはわが国大学での観光教育・研究の質的向上を図ることにあった。

当地への訪問は、ローゼンカレッジ准教授の原忠之先生（Tadayuki (Tad) Hara, Ph.D. コーネル大学でRegional Scienceの博士号を取得）の多大な協力や周到な手配などが得られ可能になった。その原先生によれば、米国の大学での大学のランク付けは研究論文数でなされ、ホテル系ではコーネル大が突出し、観光系ではセントラル・フロリダ大学ローゼンカレッジはネバダ、ミシガン、ジョージ・ワシントン大などに続いて4番目の地位にあるとのことである。残念というか、意外というか、10年近く前に見学を訪れたハワイ大はそういうランク付けにはまったく上ってこないという。また米国の大学の教壇に立つ正規（full-time）の日本人教師は結構いるものの、観光やホテル系では原先生1人のみということであった。

ここでは、ローゼンカレッジの実践的な観光教育を行なう上で不可欠なオーランドという立地、インターンシップを重視した当カレッジの教育の特色を紹介するとともに、山口大学経済学部観光政策学科の学生のなかから当カレッジ大学院の修士課程ホスピタリティ・ツーリズム・マネジメントに入学を希望し、近い将来、観光領域で世界的に活躍できる日本人学者が原先生に続き出てきて、わが国の観光教育や研究が向上することを期待し、当カレッジの大学院（修士課程）への入学の手続きなどを簡明にご案内したい。



セントラル・フロリダ大学へのゲート

オーランドという立地

「土地」あるいは「立地」条件は、経済学で言う資本の三要素「資本、労働、土地」、マーケティング論で出てくる4P's (Product, Place, Promotion, Price)、中国で古くから言われてきた「天の時、地の利、人の和」などに共通して見られるように、いかなる活動、とりわけ対個人サービスにとって大切であると考えている。セントラル・フロリダ大学ローゼンカレッジは、地元の観光産業界と緊密に連携して教育・研究活動などを行なっている立地依存型の単科大学という印象を受けた。まずオーランドがどのようなところか紹介したい。

米国フロリダ州オレンジ郡オーランドは、大西洋岸のケネディー宇宙センターから65キロほど内陸に入ったフロリダ半島の中央部に位置し、地勢的に平坦で川が見られず数多く湖が点在するという低湿地帯で、もとはジャングルであったが今は常夏リゾートタウンとなっている。人口は20-30万人程度、周辺部を含めれば百万人程度となる。オーランドの都市化は、1971年に開園のディズニー・ワールド・リゾートによる。観光客に日帰り客を加えた訪問客 (visitors) の数は、年間4千8百万人となっており、全米でもトップクラスの地位にある。

ディズニー・ワールド・リゾートは開園から35年経過するが、オーランドの集客の目玉であることに変わりはない。その敷地面積は47平方マイル (75平方キロ) であり、東京ディズニー・リゾートの30倍をはるかに超えるという規模である。敷地内には、東京ディズニーランドのモデルになったマジックキングダム、未来と宇宙がテーマのエプコット、世界の動物などをテーマとしたアニマルキングダム、映画をテーマとしたMGMスタジオ、遊具の多いプレジャーアイランドと5つのテーマパークがあり多様性に富む。今も広大なジャングルの中にある各テーマパークの間には無料のバスやモノレールが頻繁に運行し移動は便利である。ただ、このジャングルから市街地に抜け出すバスは少なく、その乗り場がなかなか見つからないことは確かで、よそ者やマイカーを有しない交通弱者にとっては不便なところでもある。マイカー社会にあって、公共交通・システムがおろそかになり、これが世界の観光地オーランドの課題であると、当地の政府関係者から聞いた。

2005年のディズニー・ワールド・リゾートの5つのテーマパークの入園者総数は5千万人弱で、そのうち入園者が一番多いのはマジックキングダムの1千600万人余である。マジックキングダムは、メインストリートUSA、ファンタジーランド、リパティースクエア、フロンティアランド、アドベンチャーランド、トゥモローランド、ミッキーのトゥーンタウン・フェアと7つテーマランドからなり、東京ディズニーランドと比較するとテーマランドの数と入園者数はほぼ同じである。ちなみに、東京ディズニーランドと東京ディズ

ニーシーからなる東京ディズニー・リゾートの入園者数は約2千500万人であり、本場オーランドのディズニー・ワールド・リゾートのほぼ半数である。ディズニー・ワールド・リゾートの他にもシーワールドやユニバーサル・スタジオなど他のテーマパークや遊園地 (amusement park)、巨大なショッピングセンター、州政府所有のコンベンションセンター、数多くの広大なゴルフ場などといった集客装置もたくさんある。ちなみに、オレンジ郡コンベンションセンターの展示場面積は21万平米で、シカゴ27万平米、ラスベガス24万平米に次ぎ全米3位である。わが国にはない圧倒される規模のものである。コンベンションセンターの周辺には、リッツ、シェラトン、マリオット、ローゼンなど客室数1,000室以上の超大型の豪華ホテルが幾つもあり、ハイヤット、ヒルトン、ウェスティンなどの有名ホテルもここ1-2年で竣工の運びとなっている。オーランド観光局の公式サイトなどでは、宿泊施設の客室総数は114,000室、レストラン、アトラクション、ナイト・エンターテイメント・スポット、スパなどは100近くとなっている。その他、ディズニー・ワールド・リゾートの敷地内外などにもそうした超大型の豪華ホテルが幾つかある。

ホテル、ショッピングセンター、コンベンションセンターなどの巨大な観光関連施設の建設だけではなく、観光施設の建設が一巡した今日、住宅の建設が急ピッチに進んでいる。筆者が宿泊したホテル客室で目にしたオーランドの紹介記事では、オレンジ郡を含めたセントラル・フロリダ3郡の2005年の住宅着工件数は3万件、そのうち非定住者がかかわるコンドミニアムが2,100件で、ダウンタウンでのコンドミニアムの価格は過去2年で30万ドルから200万ドルに跳ね上がり、不動産取引では全米でも10の指に数えられるほどになっていると記載されていた。プロゴルファーで世界的に有名なタイガー・ウッズなどのスポーツ選手や芸能人のケネディー宇宙センターで働く高級技術者の豪邸なども数多くあるという。ただサブプライムローンの問題で、不動産価格が現在どのようになっているかは知らない。繰り返すが、今後のオーランドの建設の方向・課題は、公共交通を含めた都市整備である。

郊外型ライフ・スタイルが追求されるなか、オーランドの開発が観光資源

開発から不動産開発という新たなステージにシフトしたことは確かであるが、観光で一度オーランドを訪れた者が定住者となっている都市であること、80年代以降の観光客が落とすホテル・レストラン税の増収で地域住民の税負担が軽減されることなどにより、いわゆる観光公害と称される定住者と非定住者との各種トラブルはあまり話題にならないとのことであった。

セントラル・フロリダ大学ローゼンカレッジ

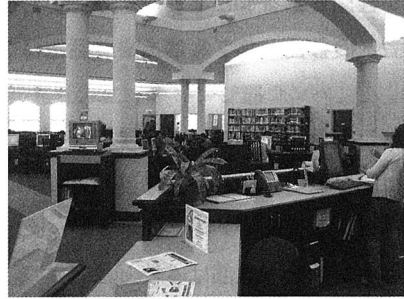
セントラル・フロリダ大学ローゼンカレッジ（単科大学）ホスピタリティ・マネジメント学部は本校とは50キロほど離れたところにある。2001年にホテルやリゾートを所有する資産家のハリス・ローゼン氏の1千800万ドル（うち土地800万ドル、現金1千万ドル）の寄付とフロリダ州政府による同額の拠出金により開校することになったと聞いた。そうした経緯からRosen Collegeと呼ばれる。

建物の概観は、赤みがかった屋根に黄色い壁と白い柱といった、太陽と水をアピールする地中海沿岸の建築をイメージしたものである。校舎の延べ床面積は約5万平米で、その建設に2千800万ドルが注ぎ込まれている。配置は、ハイテクの教室18室、事務・教育センター、食堂やバーについて教える教室（200席）、ビール・ワイン演習室、調理室2、講堂（400席）などとなっている。そのほか隣接の学生宿舎の収容力は400名弱となっている。図書館には観光・ホスピタリティ系の図書や学術誌がまとめて並べられていた。資料収集という面では、開学から日が浅く、ハワイ大学の旅行・観光産業経営スクールの資料室には未だ及ばない。外部からの見学者にとっては、食堂やバーについて教える教室、ビール・ワイン演習室、調理室など、調理師専修学校の思わせるような教室が印象的である。筆者は、10数年前、中国の北京旅游学院という単科大学を訪れたことがある。大学といえども、あまりに多くの実習用の鍋や釜がぶら下げられたり並べられたりした教室の光景を見て、奇異に感じたが、ローゼンカレッジにも少なからず専修学校的な色彩があった。

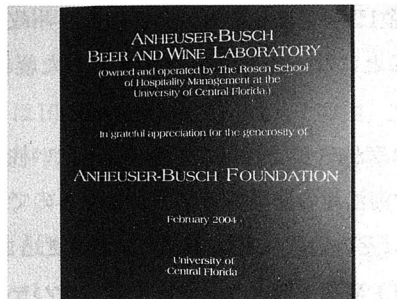
ただそれらは、パリのホテル・リッツ近くにあり、世界の一流ホテルのシェフを養成していると聞く、エスコフィエ学院という調理師専修学校にとっても及ぶものではないように思える。



ローゼンカレッジの中庭と八角亭



図書館内部



ビール・ワイン演習室入り口のプレート

当学部のビジョンは、中庭の八角亭の鴨居に、同校の学風 *Professionalism*, *Leadership*, *Service* の3文字が表わされているように、ホスピタリティやツーリズムにおける教育、研究、学究、産業界の世界的取り決めのリーダーとなることを自覚することである。2007-2012年の中期目標は、先進的な教育・研究機関として産業界や学会から認知されることのほかに、ホスピタリティの顕著な教育を学部生・院生に提供すること、優れた教職員を採用し保持していくこと、パートナーシップをリードするホスピタリティの大学であることが挙げられている。

オランダという地の利を活かし、学部生75名、教員6名でスタートした同校は6年後の現在、学部生2千名強、教員45名（非常勤講師含まず）にまで増加し、教育・研究とともに国内外で存在感を増すことになってきている。1学年の学生数は平均で500名前後ということになる。アジア系の学生の数はきわめて少ないなか、日本からの女子留学生2人を見かけた。

卒業生の就職率は観光産業を中心としてほぼ100%である。公立校とあって年間の学費は日本円で50万円程度に抑えられているようで、学生数は今後とも激増の一途をたどりそうである。ただ現有の校舎の学生収容能力を考えれば、今後、遠隔地教育が積極的に導入されていくものと考ええる。

地の利は、具体的には、全学生にとって余りある有償のインターンシップ先、ひいては学生に合った就職先の確保、理論と現実を結びつけるという実学教育の実施、観光産業の依頼に基づいた受託研究の実施、ひいては同校への寄付金の増加などとなって表れている。上述のビール・ワイン演習室（Beer and Wine Laboratory）の入り口にはANHEUSER-BUSH FOUNDATIONというビール会社のプレートがはめ込まれており、ローゼンだけでなく、多くの資産家や企業がローゼンカレッジに寄付をしていることがわかる。

Donorや Givingと言われる民間からの寄付金が教育・研究に大きな役割を果たすとは聞いてはいたが、ローゼンカレッジを訪れそれを実感し、同時に久しくわからなかった事の一つ、ホスピタリティとツーリズムをどう使い分けするのかもわかった気がするようになった。わが国では、ホスピタリティとは「もてなしのよいこと」と訳され、礼儀作法や心根などがあれこれまことしやかに唱えられているが、そうしたことのほとんどは米国では空念仏であると思えるようになった。米国では、金に結びつかないような礼儀作法や心根など、ホスピタリティとは言えない。まずはHow to make money?で、その後のホスピタリティである。ホスピタリティ・インダストリーという場合、主にホテルやレストランといった、チップがついて回るような、いわゆるよそ者相手の水商売の流れをくむサービスを指す。よそ者相手の水商売という言葉はあまりにも俗で刺激的なので、観光客への対個人サービスと改め

る。それに対して、ツーリズムは観光客などを通じた地域全体の社会経済的な活動であって、それを取り仕切るのは政府やその周辺ということになる。原先生の一言、「ホスピタリティでないと大学に寄付金は集まらない。ツーリズムではだめだ。」というのはまさに本質を突いた発言と思えた。ホスピタリティ・マネジメント学部はまさに産学の協同の需要から生まれた領域と言える。

卒業に必要な総単位数は120単位で、日本とほぼ同じである。その内訳は、1年次に受講することになる教養系の科目、すなわちコミュニケーション、文化・歴史、数学、経済学などの社会科学系科目、自然科学の単位が36単位で、2年次から専門のカリキュラムがはじまる。ホスピタリティ・ツーリズムの基礎3単位が基盤に据えられている。それに相前後して、コンピュータ、統計学、マイクロ経済学、マクロ経済学、代数学は、セントラル・フロリダ大学本部が行なう一般教養科目G E P (General Education Program)を受講し単位を取得することが条件となる。ホスピタリティ・マネジメントの必須となるコア科目は12科目34単位である。表1に見られるとおり、食物とサービスの系のものを除き、財務、会計、マーケティング、労務、広報、法、戦略、コミュニケーション、ファイナンスなどという単語に見られるように、ほぼすべて経営系の科目である。選択必須科目は7つのうち6つの選択であり、ほぼ必須科目と言える。よって、ホスピタリティ・オペレーションという接頭語はついているがコア科目と表記されている。

選択科目は、リゾート系、テーマパーク系、ツーリズム系、宿泊系、財務・テクノロジー系、ゴルフ系の6つのコース（各コース15単位）があり、学生はそのうちの1コースを選択すればよい。各系には5-9科目のメニューが用意されている。このコースの科目設定はインターンシップと関連づけられたものである。当大学では秋（8-1月）、春（1-5月）、夏（5-8月）の3学期制を採用しており、インターンシップは各学期に対応して、インターンシップⅠ、インターンシップⅡ、インターンシップⅢを開設している。各1単位で計3単位の必須科目である。基本的に学生は2年次にインターンシップを修

得することになる。セントラル・フロリダ大学全体としても、インターンシップをCO-OP (Cooperative Education) ともよび、産学の協同を推進している。

原先生に連れられてインターンシップのコーディネーターにアポイントなしに会いに行った。原先生が、「いま忙しい」と担当者のトム・バー氏に聞くと、怪訝な顔で「忙しいに決まっている、600人もの学生のインターンシップをハンドリングしている」と。彼が、600人もの学生のインターンシップをどういうルールのもと、どうハンドリングしているのか、どうインターンシップ先を開拓しているのか、学生および大学の教育・研究にどのようなメリットがあり、どのような課題が残っているのかなど、聞いてみたいことは山のようにあった。幸い、忙しいなか時間を割いて、インターンシップの説明をしていただいた。本観光政策学科でも、必須科目にプロジェクト演習2単位があり、そのなかでインターンシップを取り入れている。その構想から実行までを主に担うことになった筆者にとって、インターンシップは教育効果から見ても実にやりにくいという思いは今も変わらない。昨年度は観光政策学科の第一期学生31名のハンドリングでは大変当惑しつらい思いもした。

トム・バー氏は、インターンシップがうまくいく条件として第一にロケーションを挙げた。確かにテーマパークやアミューズメント・パークでは全米の1・2の地位にあり、大型コンベンション、多くのホテル、レストラン、ゴルフ場もあり、インターンシップ先は500—600人もの学生といえどもまったく問題にならない。観光のインターンシップ先の確保は、山口大学の観光政策学科にとって大きい課題となっている。第二点は、有償とすることである。無償では、学生にもインターンシップ先にも、ホスピタリティ教育上、よくないとのことであった。ちなみに山口大学の観光政策学科では、教育上、インターンシップは無償としている。1時間が9ドルというのが学生アルバイト代の相場のようなではあるが、それでもお金を通じれば、仕事やホスピタリティの緊迫感が出てくるとのことであった。それはローゼンカレッジの学部長が直々に業界に乗り込んで、「うちの学生をただでは使わせない」と掛け合い、決めてきたそうである。それは、サービス労働力の不足という状況がその地

域で恒常的に続いてきたことの現われである。もちろん学生が、インターンシップ先が自分にフィットしないと感じた場合は、インターンシップ先を変えることも可能という。インターンシップが課される2年生を問わず、多くの学生は週2日16時間 (2×8) のインターンシップ、残り5日間は学園生活を送っている。ローゼンカレッジは、学生が休学や退学なしに、正規の従業員としてインターンシップ先で働くことも認めている。たとえば、ディズニー・ワールド・リゾートでは、多くの場合ファースト・フードの料飲関係サービスでインターンシップが行なわれ、一部の学生は次年次以降も正規のインターンシップの権利が認められる、採用側その後の採用や社員教育のコストを下げる事が可能とのことである。ディズニーが上級インターンシップと認めた学生には週500ドル支払われるという。繰り返しになるが、How to make money? そのためにはいかにHospitalityのレベルをあげるのかが原点である。

インターンシップのハンドリングの決まりごとや申請書のフォームなどについてはウェブサイトに掲載されている。トム・バー氏から説明を大方の説明は受けたが、残念ながらあまり正確な記憶やメモが残っていない。関心のある読者のために、のちに原先生にアット・ランダムに挙げていただいたサイトを付しておく。

Cover sheet and semester report <http://www.coop.ucf.edu/phpforms/enrolledcover.php>

Program evaluation <http://www.coop.ucf.edu/phpforms/enrolledeval.php>

Student Self-evaluation <http://www.coop.ucf.edu/phpforms/enrolledstudenteval.php>

Employer Evaluation <http://www.coop.ucf.edu/phpforms/employerstudenteval.php>

Semester Report (by students) <http://www.coop.ucf.edu/?go=enrolled-assignments>

Verification of Work hours http://www.coop.ucf.edu/resources/Rosen_Verification.pdf

http://www.coop.ucf.edu/resources/Rosen_CoopHours.pdf

Semester Assignments (links to other pages)

<http://www.coop.ucf.edu/?go=enrolled-assignments>

(表1) Degree Requirements

1.	UCF General Education Program (GEP) A. Communication Foundations B. Cultural and Historical Foundations C. Mathematical Foundations Select MAC 1105 College Algebra Select CGS 2100C Computer Fundamentals for Bus or STA 2023 Statistical Methods I D. Social Foundations Select ECO 2013 Macroeconomics or ECO 2023 Microeconomics Select one: PSY 2012, SYG 2000, ANT 2000 E. Science Foundation	(36 hrs) 9 hrs 9 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 6 hrs
2.	Common Program Prerequisite HFT 1000 Introduction to Hospitality/Tourism	(3 hrs) 3 hrs
3.	Foundations Quantitative Tools CGS 2100C Computer Fundamentals of Business or STA 2023 Statistical Methods I ECO 2013 Macroeconomics or ECO 2023 Microeconomics MAC 1105 College Algebra	(GEP) (GEP) (GEP)
4.	4. Hospitality Management Core FSS 2221C Quantity Food Preparation HFT 3540 Guest Services Management HFT 2403 Hospitality Financial Accounting HFT 3431 Hospitality Managerial Accounting HFT 2500 Hospitality Marketing HFT 2220 Hospitality Human Resource Mgmt HFT 3444 Hospitality Information Systems HFT 3600 Legal Environment in Hospitality HFT 4295 Leadership and Strg Mgmt in Hospitality Ind HFT 4286 Hospitality Communications HFT 4462 Hospitality Industry Finance HFT 3933 Distinguished Lectures in Hosp Mgmt	(34 hrs) 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 1 hr
5.	Hospitality Operations Core (Choose 6 of the following 7) HFT 2254 Lodging Operations HFT 3700 Tourism Management HFT 2750 The Event Industry HFT 3263 Restaurant Management HFT 3273 Principles of Resort Time Sharing HFT 4755 Theme Park and Attraction Mgmt HFT 4277 Yacht, Country, and City Club Mgmt	(18 hrs) 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs 3 hrs
6.	Internship HFT 3940 Internship I HFT 4941 Internship II HFT 4944 Internship II	(3 hrs) 1 hr 1 hr 1 hr
7.	Special College Requirements Final exams will be given during Final Exam Week only. Transfer students to this program must take a minimum of thirty (30) credit hours in Hospitality Management core classes or restricted electives at UCF.	
8.	Restricted Electives (以下省略)	(18 hrs)

(出所) <http://www.hospitality.ucf.edu>

ローゼンカレッジ大学院（修士課程）ホスピタリティ・ツーリズム・マネジメント

原准教授に連れられ大学院コーディネーターのキャシー・G・キングさんの執務室を訪れた。山口大学経済学部の観光政策学科の学生がローゼンカレッジの修士課程に入学するにはどうしたらよいかをたずねた。

入学申請（REQUEST APPLICATION）をウェブサイト<http://www.graduate.ucf.edu>で行なうとともに、ローゼンカレッジには、学業成績を証明する①GPA、②TOEFL E、③GMATまたはGRE、④英文成績証明書（第三者評価機関GSAまたはWES）を提出する必要があるとまず聞いた。

①のGPAとはGrade Point Averageの略で、もともとアメリカの大学で一般的に行われてきた学生の成績評価で、近年日本の多くの大学にも導入されている。各授業科目の成績を5段階（A、B、C、D、E）で評価（単位取得はD以上）し、それぞれに4、3、2、1、0のポイントを与えて、単位あたりの平均GPAを出す仕組みになっている。どのようなレベルの大学にせよ、学生は当該大学で上位の成績をおさめておくことが望まれる。②のTOEFL Eは英語力を、③のGMATまたはGREは数学または自然科学の基礎力をはかるための指標とされ、米国に留学するためには各国に設置されている米国の出先機関で受験をしなくてはならない。TOEICの読み替えはない。④の英文成績証明書は、レベルのちがう各大学学生の成績を第三者評価機関GSAまたはWESで認定しようとするものである。それとともに、申請者はローゼンカレッジに学生の成績証明書を英文に翻訳したものを送付する必要があるとのことであった。

次に大学院の履修内容であるが、それは①修士論文提出の場合と②そうでない場合の二つに分けられる。前者は博士課程への進学そして学者・研究者を志望する者向けに、後者は終了後に業界に就職を希望する者向けになっている。

①修士論文提出の場合（36単位）

- ・ 必修科目Common Managerial Toolsは9科目—9×3単位
- ・ 選択科目Restricted Electivesは1科目—1×3単位
- ・ 修士論文—6単位

②修士論文を提出しない場合（3.9単位）

- ・ 必修科目は9科目—9×3単位
- ・ 選択科目は4科目—4×3単位

正規の学生は各学期（3学期）に3つの授業9単位を取得しなければならないので、必修科目の一つでも落とせば留年そして退学ということになる。その他、学部レベルの統計学を履修しておくことが条件とされる。授業は月曜から金曜日の午後4時半までが昼のクラスであるが、大学院の授業のほとんどが午後6時から9時までの夜学となっている。

下表2の必須科目に見られるように、ローゼンカレッジ大学院では経営系の科目が主で、入学を希望する学生は、学生時代に統計学のほかに、簿記、会計、財務など実践的な経営学を履修しておくことが望まれる。米国の大学への留学に当たっては、全般的に言えるのは分析の手段Toolsが重要視される。

(表2) ローゼンカレッジ大学院（修士課程）の必修科目と選択科目

必修科目Common Managerial Tools

Course Number	Course Title
HFT 6245	Managing Hospitality and Guest Services Organizations
HFT 6251	The Management of Lodging and Resort Operations
HFT 6710	International Tourism Management
FSS 6365	Management of Corporate Food Service Operations
HFT 6477	Financial Analysis of Hospitality Enterprises
HFT 6596	Strategic Marketing in Hospitality and Tourism
HFT 6228	Hospitality Human Resources and Leadership
HFT 6586	Research Methods in Hospitality and Tourism
HFT 6296	Strategic Management in Hospitality and Tourism

選択科目Restricted Electives

Course Number	Course Title
HFT 6227	Advanced Training and Development in the Hospitality Industry
HFT 6247	Organizational Communications in Hospitality/Tourism Enterprises
HFT 6259	Case Studies in Lodging Management
HFT 6267	Case Studies in Restaurant Management
HFT 6319	Convention Center Management
HFT 6347	Advanced Vacation Ownership Resort Planning
HFT 6446	Hospitality/Tourism Information Technology
HFT 6476	Feasibilities Studies for Hospitality/Tourism Enterprises
HFT 6526	Vacation Ownership Resort Sales Management
HFT 6528	Convention and Conference Sales and Services
HFT 6533	Hospitality/Tourism Industry Brand Management
HFT 6608	Hospitality/Tourism Law and Ethics Seminar
HFT 6636	Hospitality/Tourism Risk Management
HFT 6707	Economics of Travel and Tourism
HFT 6xxx	Tourism Industry Analysis
HFT 6797	Event Administration
HFT 6971	Research-Thesis (for thesis option)

原准教授の授業を見学して

わが国大学でも、授業の改善を目指し、ピアレビューという形で他の教員による授業見学とコメントや意見交換が行なわれるようになってきたが、一般的に言って、見学する側・見学される側ともにあまり積極的ではない。それに対して、米国では多くの教員が授業を公開することに、きわめて積極的である。授業を見学してよいかを知り合った先生方に問うと、すべてが好意的に自分の授業を見ていってくれとの返事をえた。教育サービスが競争的になっている社会においては、「良い鐘は打たねばわからない」式に、自らの講義の特徴や授業管理の優れた点を他の教員にアピールするのは当たり前のことのようなのである。筆者には、各教員の授業への自信の表れにも思えた。結局、見聞きすること多く、授業見学する時間が詰まってしまったこともあって、Hospitality Financial Accountingという授業であったと思うが、原准教授の受講者数60-70名の講義一つのみしか見学できなかった。

日本の大学では、それくらいの受講者数になると、教員は私語や授業途中での学生の出入りや出席確認などで悩まされることになるケースが多い。米

国の学生は自己主張が強く、教員に挑発的な態度をとると聞いてはいたが、原准教授の授業ではそうした光景を目にすることはなかった。



原准教授の授業風景

筆者がとくに注目したのは、学生がすべて電波を飛ばす（電卓大の）コンパクトな発信機を有し、投影機で映し出される画面下欄に各学生に割り当てられた発信番号のボタンが①②③④と順に配置され、画面上の質問に続き3つ4つの回答が用意され、学生は正解を選択番号で押す、しばらくして正解のボタンは赤、不正解のボタンは点滅しないという、まさにテレビのクイズ番組のような光景が教室内で繰り広げられていたことであった。さらに興味深かったのは、正解者と不正解者の数が、画面の小窓に棒グラフで表示され、授業最後に各自の正答率がクラスでどのあたりにあるかを示す、そして毎回の授業の正答率が小テストとなって記録されていき成績評価に反映されるということであった。原准教授は正答率の低い学生を呼び出し、個別指導を行なうという。授業中、学生は立て続けの質問で、隣の学生と相談する間もなく、ましてや授業途中で教室を抜け出し一服することなどはできない。もちろん緊張感を和らげるために、授業の最後あたりで、ウォール街で成功している株式トレーダーの一日と題するようなテレビ番組も途中で放映されていた。学生の心理と生理的な状況を実によく把握していると感心させられた。教員は出席カードの配布・回収といった雑務に追われることもない。原

准教授はセントラル・フロリダ大学全体の先端OA機器を用いIT教育を推進する十数名の教員の一人でもあるそうで、今このクイズ形式の授業を試行しているそうである。近い将来、こうした方法が全米の大学に定着する勢いである。わが国では大阪大学がこのシステムに熱心であるという。

原准教授の高度な授業を目の当たりにして、感心させられるとともに自らの授業テクニックのレベルの低さを痛感させられ、しばらく考え込んだ。それと同時に、最先端技術の教育にも欠点はあるようにも感じた。それはクイズ形式の授業を突き詰めていけば、学生の書く力、新たな発想、洞察力などが身につかないという欠点である。私語の多い学生や90分じっと座って折れない学生を叱るような原始的な授業も、そう捨てたものではない、お茶の間のクイズ形式授業は学生からの苦情が出ないかも知れないが、教育のファースト・フード化をもたらすのではないかなどのことを思った。こうした考えが的外れのものか、遅れた者の自己弁護なのか、それは検証が必要である。

筆者は観光政策学科で観光経済分析を担当しているが、実のところ、遠くに出かける観光や旅行に対し、自ら積極的に関与したいとは思っていない。それは第一に多くの時間と金を要し、第二にくたびれ、そして何よりも見識を広めはするが、たいした成果は得られず、日々の仕事や生活の混乱や不健康をもたらす可能性が大きいことを知っているからである。多く見れば見るほど、現象面に目ざとくなり、その反動として本質を見ようとしなくなることもありうる。情報や通信が発達した現在、研究室や自宅にいても何でも知れる。興味ある多くの文献に当たるほうが学者人生、効果的と考えている。こうした考えや精神は今後とも堅持していくべきとも内心思っている。ただある程度は、額に汗して遠くに出かけ、現場を見るのも新たな発想や洞察力の源泉になることも否定できない。今回のローゼンカレッジ訪問は、幸いにも、原准教授のおかげで、そうした成果が少なからず得られたような気がする。最後になったが、何から何までお世話いただいた原准教授に再度衷心より謝意を表したい。